

池波正太郎

鬼平犯科帳

6



文春



文春文庫

定価はカバーに表示してあります

鬼平犯科帳 (六)

142—12

1978年12月25日 第1刷

著 者 池波正太郎

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 丁102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

：庫

鬼平犯科帳
(六)

池波正太郎



文藝春秋

目次

礼金二百両	7
猫じゃらしの女	41
剣客	77
狐火	111
大川の隠居	179
盗賊人相書	214
のっそり医者	246

鬼平犯科帳
(六)

れいきんにひやくりよう
礼金二百両

一

寛政三年の、年が明けた。

長谷川平蔵は、三ガ日を清水門外の役宅にすごし、新年の行事をすませたのち、四日の午後になつて、

「久栄。骨やすめだ」
妻女をともない、目白台の私邸へもどつた。

私邸に暮している長男の辰蔵、次女の清、それに養女のお順などと、久しぶりに家族だけの、正月の団欒をたのしむつもりだったのである。

だが……。

家族そろって食事を共にしたのは、四日の夜だけのことで、翌五日は昼すぎになっても、夕暮れが来ても、平蔵は寝間から出て来なかった。

「よく、ねむれるものですね、母上」

と、辰蔵があきれて、

「先刻、のぞいて見ました。いびきをかいておられました」

「お疲れなですよ、父上は……あまりにもひどい、烈しい疲れが、お躰の中へたまりたまっておられるのですもの」

「ははあ……」

「去年も一昨年おとしも、まるで夜も日もなしに、御役目にはたらかれて……」

久栄の声には、切実なものがただよっている。

ただ単に、役目をつとめているだけのものではない。平蔵は、わがいのちを張って盗賊どもを相手に休む間もなく闘いつづけてきたし、また長官みずからが、そうしてはたらかなくては、配下の与力・同心たちもいのちがけになってはくれぬ。

「つくづく、ばかばかしく思うのだよ、久栄」

いつであったか平蔵が、妻女におもわず零こぼしたことがあった。

「このように、一所懸命にはたらかなくてもよいのだ。よい加減にしておいて、他の人に交替してもらうのが、もっともよいのさ。これではおれも、とうてい長生きはできまいよ」

「では、よい加減にあそばしたなら、いかがで……」

「できれば、な……だが、どうもいけない」

「なぜ、いけませぬ？」

「この御役目が、おれの性しょうにびたりはまっているのだ。これはその……まことにもって、困ったことだ」

「まあ……」

「他のだれがやっても、自慢ではないがおれほどにできまい。なればこそやめられぬ。これはな、久米。なにも悪党どもを征伐して諸人の難儀をふせぐ、などという偉そうな気持からではないのだ。つまりは、その……」

「この御役目がお好きなので……」

「いや、そうでない。好きではないが、やめられぬという……理屈ではわからぬことだ。つまりはその、盗賊相手にはたらく御役目へ、おれはどっぷり足をとられてしまっている。いまのおれとくらべて見て、以前に、いろいろとつとめた他の御役目なぞの味気なさをおもい出すと、ぞつとしてしまうのだ」

「まあ、そのようなことを……」

「そのとおりだ。いずれも堅苦しく肩ひを張っておつとめをする役目で、なんの新しさも感動もなかった。それにくらべると、いまおれがしていることは、日に日に新しい。いろいろな人たちの、いろいろな心とふれあい、憎みながらあわれみ、あわれみつつ闘わねばならぬ。四十をこえて長谷川平蔵、人の世がまことにおもしろくなってきて、な……」

なのだそうである。

その日の夜に入って……。

久栄は、みずから台所へ立ち、良人が好物の白粥しらがゆに葱入りの煎り卵をそえ、寝間へはこんで行った。

「ずいぶんとねむったものだ……」

久栄に起されて平蔵は、われながらおどろいたらしい。

「ものも食わず、用も足さずにはなあ……」

さも、おいしそうに粥と卵を食べるや、

「今日は、上様（將軍）が小松川のあたりへ鷹狩たかがりにおいであそばしたはず……」

そんなことをつぶやいていたかとおもうと、またもいびきをたてはじめた。

平蔵の寝顔には、疲労が青ぐろく浮きあがり、ひげもあたらぬままなので、行灯あんどんのあかりで見ると、まるで病人に見えた。

久栄には、よくわかっている。良人・平蔵の苦労や疲労というものが、ただ悪人どもを相手にしたらく、ということのみではないことを……。

「火盗改メ」という、この役目に励めば励むほど、長官おかしらは、

「金が要る」

のである。

幕府からは四十人分の役扶持やくぶちが出るけれども、とてもとても足りるものではない。

犯罪を取り締る役目で、しかも寸分の隙もなく事をはこぶ機動性が欠くべからざる火盜改メだけに、なんといっても、こちらのきいた密偵をつかい、金を惜しまず、江戸の暗黒面からの情報を絶えず得ておかねばならぬ。

同じ旗本でも、火盜改方の長官をつとめるには、よほどに有福の人でないとつとめきれない、といわれているほどであった。

長谷川平蔵がこの役目に任ずる前は、家計にもかなりゆとりがあったのだけれども、現在は家につたわる刀剣や書画骨董を売り、捜査の費用にあてることもめずらしくないのである。

いまや平蔵の場合、火盜改メの加役（臨時）ではなく「本役」になってしまっているから、この先、何年、この役目をつとめるか知れたものではないのだ。

配下の与力（十名）同心（約四十名）も、こうした長官の苦勞をよく知っているから、妻に内職をさせ、その賃金で、自分がつかっている密偵をねぎらったり、探偵のための費用の、

「自腹を切ったり……」

しているらしい。

彼らが、それほどまでに、

（おれの胸のうちを、くみとっていてくれる……）

それがまた、平蔵にはたまらないのである。

良人が、またもねむりに入っただのを見とどけてから、久栄は深いためいきを吐き、暗い廊下へ出た。

用人の松浦与助があらわれ、与力・佐嶋忠介さじまちゆうすけの来訪を告げたのは、このときであった。清水門外の役宅から駆けつけて来た佐嶋与力の顔は、緊張に引きしまっている。緊急の事件が、発生したのであろうか……。

二

この日。

佐嶋忠介は、与力の主任として役宅の当直をつとめていた。

さいわい、旧臘きゅうろうの「鈍牛事件」のろうし以来、これといった事件もなく、江戸市中は平穩無事であった。佐嶋与力は、早目の夕食の席へ当直の同心・酒井祐助、竹内孫四郎ら五名をよび、

「まだ松もとれぬことだ。お頭かしらもおゆるし下されよう」

すこしだが、酒をふるまった。

佐嶋の叔父にあたる谷善左衛門が、役宅へあらわれたのは、このときである。

（めずらしいこともあるものだ）

佐嶋忠介は、この義理の叔父の来訪をいささか奇異におもった。谷の叔父が役宅へ自分を訪問するなどということは、かつてなかったことだ。ことに叔母（佐嶋の父の妹）が亡くなってからは、すっかり疎遠となり、佐嶋にしても、すでに五年ほど叔父の顔を見ていない。

「これは、おめずらしいことで……」

玄関へあらわれた佐嶋へ、

「突然で、申しわけないことじゃ」

谷善左衛門は、六十をこえて、めっきりと小さくなった臍をすくめるようにしたが、かぶった頭巾をぬぐうとはせぬ。

善左衛門は父の代から、二千石の大身旗本・横田大学義郷だいがくよしさとの家来で、主人の信頼が厚い、ときいている。

学問もあり、書道にも達している善左衛門は横田大学の側近くつかえ、

「なくてはならぬ……」

秘書というべきであろうが、人ぎらいなことはむかしからで、それも高慢だからとか狷介けんかいだからとかいうのではない。

神経のはたらきがこまかく、気が小さくて、見ず知らずの他人とは口もきけぬという……一種の神経症でもあったものか……。

その叔父が單身、役宅へたずねて来たのだから、佐嶋が不審におもったのもむりはなかった。何やらもじもじと面おもてを伏せたままいいよどんでいる谷善左衛門へ、

「ま、おあがり下さい。他人のまいらぬ部屋もありますれば……」

と、叔父の人柄をわきまえている佐嶋がいうや、

「む……では、そつと、な」

「心得ておりますよ」

役宅の一室へ、叔父をみちびき入れると、ようやくに頭巾をとった善左衛門が、

「どなたも、まいらぬように、していただきたいのじゃが……」

「大丈夫です。なれど、お寒くはありませぬか。火を……」

「いや、要らぬ。要りませぬよ」

「では……何ぞ、急な御用事でも？」

「む……」

まだ、いいよどんでいる。

「叔父上……どう、なされました？」

「む……あのな、いまより、わしが申すこと、他言してもろうては困る。よいか、よろしいか。そのことを誓ってもらいたいじゃ、忠介どの」

「はい。誓いましょう」

「そ、そうか。武士に二言はないな」

「いかにも」

「では、申します。あのな、実は……若様が、かどわかされたのじゃ」

「なんですと……」

叔父が「若様」というからには、叔父の主人・横田大学の長男・千代太郎のことにちがいない。その、今年で十二歳になる若様が誘拐された、と叔父は知っているのだ。

それならば、大身旗本の家にとっては大事件である。

すぐさま、しかるべきすじへ届け出て、捜査してもらわねばならぬ。

それを、老いた家来の谷善左衛門が頭巾に顔をかくし、ひそかに火盜改メの役宅にいる甥の佐嶋忠介をたずね、声をひそめて告げるとは、

(いよいよ、妙な……)

であった。

「これはな、忠介どの。表むきにはできぬことなのじゃ」

「何故に？」

「ま、ともあれ、この手紙を読んで見て下され」

「拝見いたします」

それから一刻(二時間)余を経て、目白台の長官の私邸へ駆けつけた佐嶋与力が、
「お疲れのところを、おそれいりまするが……」

長谷川平蔵へ、面会をもとめたのである。

「かまわぬ、ここへ通せ」

久米にゆり起されたとき、平蔵は「事件出来」を感じた。

「佐嶋。どこが襲われたのだ？」

「いえ……盗賊ではございませぬ」

「火つけか？」

「いえ、その……実は、谷の叔父が役宅へまいりまして、この手紙を……」

恐る恐る佐嶋がさし出した手紙を一読した平蔵は、